

味なく淡緑色で対称の妙を示していた。

次にミヤコヤブソテツは先に本誌上に報じた千葉県三石山附近と此所奥武藏の低山地、山根村鎌北との2個所が今の所関東で判明している自生地である。山根村産については野草誌上に記したが、相隣る二つの小谷にのみ生育し、附近の地質は秩父古生層からなり石灰岩の露頭も見られる。千葉県三石山附近は第三紀層で石灰岩もないがメヤブソテツやクモノスシダも自生し、小池清氏によれば黒滝不整合以北の関層群は化石を多く含み石灰分が多いとの事で、ミヤコヤブソテツの自生も之に關係があるのであろう。

更に近時奥武藏にはこの他幾多の注目すべきシダの分布が明らかとなつたが、特に著しいものを以下に掲げる。(産地等の詳細は隨時野草誌上等に発表した)。

アオホラゴケ (*Crepidomanes latealatum* Copeland) オオキジノオ (*Plagiogyria euphlebia* Mettenius) ウスヒメワラビ (*Acystopteris japonica* Nakai) オオメシダ (*Athyrium pterorachis* Christ) カラクサイヌワラビ (*Athyrium Wardii* Makino var. *clivicola* (Tagawa) Kurata stat. nov.—*Athyrium clivicola* Tagawa in Acta Phytotax. Geobot. 3: 32, (1934)) コバノイシカグマ (*Dennstaedtia scabra* Moore) イワヘゴ (*Dryopteris atrata* Ching) マルバベニシダ (*Dryopteris fuscipes* C. Chr.) サジラン (*Loxogramme saziran* Tagawa) クリハラン (*Neochiroppteris ensatum* Ching) アオネカズラ (*Polypodium niponicum* Mettenius) オオキヨズミシダ (*Polystichum Mayebarai* Tagawa) イノデモドキ (*Polystichum pseudo-Makinoi* Tagawa var. *ambiguum* Tagawa) オオカナワラビ (*Rumohra amabilis* Ching) ホソバカナワラビ (*Rumohra aristata* Ching) シシラン (*Vittaria flexuosa* Fée)

尙、奥武藏吾野産により命名されたウスバイワヤブソテツ *Polyistichum caryotideum* var. *papyraceum* Honda は発育の稍々悪いメヤブソテツの秋季に出た若い葉を記載されたものと思う。メヤブソテツは春と秋と2回葉を崩出し、春に出た葉はその年内に枯れ、越冬するのは秋に出た葉である。

○アライツメクサ本州に現る(水島正美) Masami MIZUSHIMA: On *Sagina procumbens* L. found in Honshu.

昨年(1953)6月中旬に青森市在住の細井幸兵衛氏からツメクサ属の一種を送付された。それは青森営林局構内の植木鉢の中に普通のツメクサと共に生じて居たが、全株無毛で線濃く、花部4数にして花辦を欠き、種子表面はスンプ法にて鏡検せるところ平滑である等の差が見られた由。此の植物は上の観察記録からも略々分る如く、*Sagina procumbens* L. に当る。和名はアライツメクサ(館脇1927)=トヨハラツメクサ(菅原1937?)である。本種は斜上した花梗の頂が花後に下屈して未熟果は明瞭に点頭するのが著しい点で、果実の完熟に及び再び上向する。萼は果期に開出するを特徴とするとは

種々の書に見える所であるが、細井氏の再度の通信にも不拘、大多数の果実に於て萼は半開するに過ぎず唯開裂せる蒴を有する萼のみに開出するものも見られたとのことである。種子は全く平滑と云う訳ではなく、多少レンズ状に隆起せる細胞面と其の界面の不規則な模様とが見える。

本植物は主に北半球北部に広布し、アフリカ北部、オーストラリアにさへも知られて居るが東亞では北千島アライト島の海岸沿ひの土崩地、樺太豊原附近の路傍が既知の産地であつた。これに今回青森市が加わるが、恐らく移入品であろう。青森営林局構内には洋種植物の鉢もあることであるから、アライツメクサの微小な種子がそれ等の種子に混入して来た事も想像し得る。豊原の産も路傍と云う点から移入品と考えて良いであろう。アライト島は最も天生らしく考えられる場所ではあるが、筆者は未だ同島よりの標本を検して居ない。又館脇博士は1927年のアライト島植物目録にはアライツメクサのみを掲げてチシマツメクサを挙げられず、1934年の北千島植物目録にはチシマツメクサのアライト産を記して居られるがアライツメクサを載せられなかつた。是を忖度すれば1927年の報告を翻されてチシマツメクサに置き換へられたとも見えるが、異名中に引用が無いので脱落かとも思われる。豊原産も標本を見ず「樺太植物図誌」の図も明瞭を欠くのが残念である。アライツメクサ、トヨハラツメクサの両和名が正しく *Sagina procumbens* に命ぜられたのなら当然アライツメクサを用いねばならない。

序にカラフトミミナグサ (*Cerastium arvense* L.) が青森県弘前市近郊(多分同市北方)に相当量野生(自生?)することを村井三郎氏の採集で知つたのは一報に値する。

Sagina procumbens L. which is hitherto reported from in the neighbouring regions of Japan, Isl. Alaid and Toyohara in Southern Saghalien was found in Aomori, prov. Mutsu, Honshu. The plant in Aomori most probably may be regarded as an introduced weed. The material examined is differs from European and North American plants by the erect-patent but not spreading sepals, but the young fruits are distinctly nodding. The seeds are blackish brown and shallowly sculptured.

○モモというヤマモモの琉球方言(前川文夫) Fumio MAEKAWA: Ryukyuan vernacular "Momo" for *Myrica rubra*.

私は前にヤマモモの語源は漢名楊梅+モモであろうことを述べ(本誌 19: 151, 昭和18), 後に、モモが最初桃を意味せず、却つてヤマモモが日本の古語のモモの本体であり、その呼び方は万葉の歌にも残る程の時代迄つづいたが、それより少しく以前に大陸から導入された桃にモモの名が横すべりするに到つて上述の楊梅に基づく名が作られたのであろうと桃の信仰との関連に於て述べた(自然と文化, 第3号: 117-144, 昭和27, なお短歌研究 10 no. 8: 118-135)(昭和28)にも転載されている)。その際に現在ヤマモモ